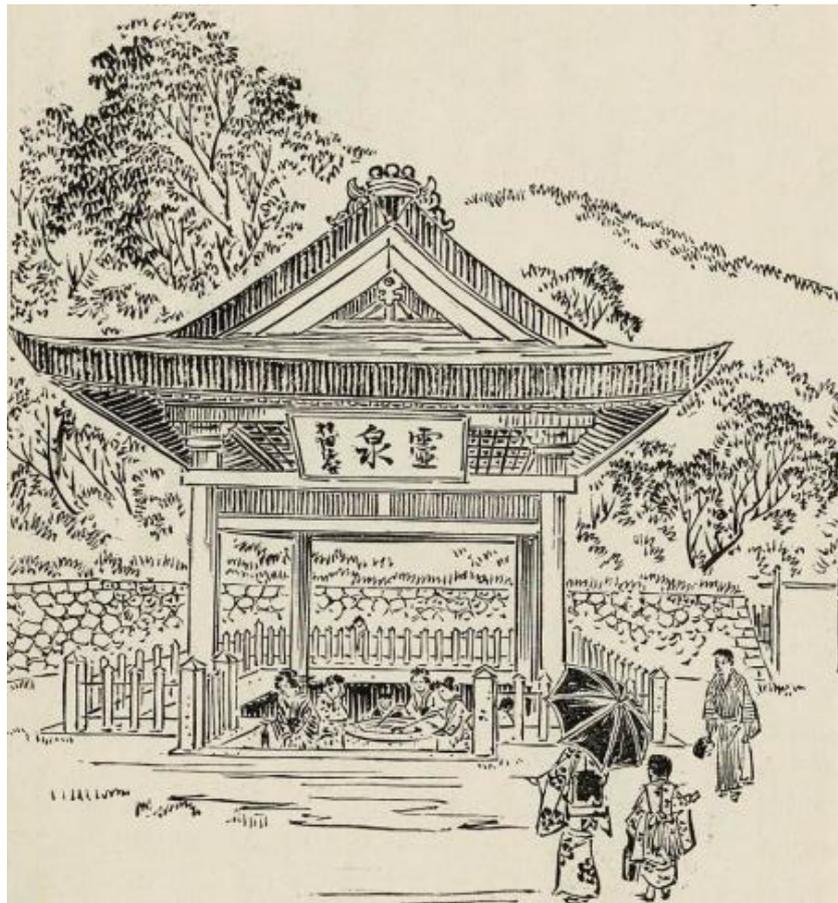


KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第108号 2024年(令和6年)11月20日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1
TEL:(078)371-3351 FAX:(078)371-5046



炭酸泉 『有馬温泉誌』(明治27年)より

炭酸せんべい

有馬の土産物の一つに炭酸せんべいがあります。大正四年発行の有馬の旅行案内『撰北温泉誌』には「風味淡泊滋養成分も亦富饒、殊に消化を促し衛生上大方の喝采を博し、進物用其他土産用として好適當品なり」とあります。

有馬温泉の炭酸泉は炭酸ガスによつて虫や鳥が死んでしまうため、かつては毒水と恐れられていました。しかし、明治八年に水質検査が行われ、実はミネラル分を豊富に含む有効な炭酸泉で、飲むと胃腸によいことが分かりました。明治十二年発行の『有馬温泉冷両泉分析表 附雑記』には有馬の物産として瓶詰された炭酸水が描かれています。

この炭酸水を活用して独自の菓子を作ろうと試みたのが、有馬の三津繁松です。彼は明治四〇年ごろに、地元旅館の風早次郎と大阪の医師・緒方惟準の指導を受けてせんべいを作り始めました。原料は小麦粉と片栗粉、砂糖、炭酸水のみです。試行を重ねて現在の生地を薄く焼きあげする方法に至ったとのこと。今では複数のお店が手がけ、ほんのり甘くサクサクパリパリとした食感が愛されています。

参考…『神戸うまいもん』『見て聞いて歩く有馬』ほか

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

光と風と夢 街角の記憶を歩く 樋口大祐・加藤正文文 三津山朋彦写真 (神戸新聞総合出版センター)――

本書は神戸をはじめ兵庫県内の街角を訪れ、その場所に刻まれた人々の記憶を探る紀行である。

例えば地下鉄「みなと元町駅」入口の赤煉瓦壁は、明治四十一年竣工の旧第一銀行神戸支店の外壁であった。震災で大きな被害を受けたが、壁の裏側を補強して活用し、今も往時の様子を伝えている。また文学作品の舞台となった場所も数多く取り上げられ、須磨区板宿は、山本周五郎の短編「陽気な客」の作中で酔客が語る亡き友人の宿があった場所だという。場所が持つ記憶に思いを馳せて街歩きを試みるのも一興である。



タンタン、ありがとう 神戸とパンダの記録 神戸新聞社編 (神戸新聞総合出版センター)

タンタンとコウコウ、二頭のパンダの来日は大震災に見舞われた人々を勇気づけ、二頭は復興のシンボルになった。おっとりした性格でマイペースなタンタンは神戸のお嬢様と呼ばれて愛された。来日から二四年、今年三月にタンタンは二八歳で病死、人間でいえば一〇〇歳近くの高齢であった。本書は神戸新聞の記事と写真で綴るタンタンの思い出の記録である。――

関西華僑の生活史 神阪京華僑口述記録研究会編 (松籟社)

書名にある「生活史」とは個人の生涯や半生を聞き取って記録したものである。本書には神戸をはじめとする各地で暮らしてきた華僑たち四五名の生活史が集められている。老舗豚まん店のオーナーが語る戦後すぐの混沌としつつも活気にみちた南京町の様子など、かつての神戸の姿が聞き書きならではの生き生きとした筆致で綴られている。また、生活史に関するブックリストもあり、本書を起点に多くの本と出会うことができる。

シビックプライド！ 甲北生が選んだいいところ集 兵庫県立神戸甲北高等学校48回生編 (交友プランニングセンター・友月書房)

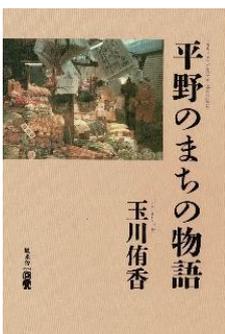
本書は県立神戸甲北高等学校の生徒が、訪れてほしい地元のスポットを取材し記事を書いたものである。高校のある北区北鈴蘭台を中心に、兵庫県内にある神社、公園、飲食店、区役所などを幅広く紹介する。高校生ならではの率直な感想や取材先の人々との交流も印象的。写真も多く、各スポットを訪れたいくなる。

平野のまちの物語 玉川侑香 (風来舎)

戦後から兵庫区平野に住む著者が、両親や近所の人々、友達のことなど、小学生時代を振り返って思い出を綴った。平野市場で商売を始めた父の仕入れに神戸駅まで自転車の荷台に乗って付いていた話。有馬街道が通行止めになるほど賑わったという祇園神社のお祭の話。石井川で魚や水草を採って遊んだことなど、心と風景が描かれている。夢野町の生家での暮らしを記した『「れんが小路」の足音』に続く作品である。

深江の心象風景 ふるさと神戸の回想録 岡田茂義著 大国正美編 (福田誠子)

東灘区の南東に位置する深江は、大正期に建てられた洋館に移り住んだ外国人らによって国際交流の場となり、後に深江文化村と称された。著者の岡田茂義(一九〇七～二〇〇三)は、深江で代々網元を務め、明治には村長を輩出した旧家の出身。明治末期から平成にかけてのこの回顧録は、当時の情景や暮らしを知ることができる貴重な証言である。著者をよく知る人々のエッセイも収録されており、陶芸や絵画、音楽、庭を愛する著者の嗜好がモダンで文化的な深江の地で培われたことがうかがえる。



神戸はみだし近代歴史めぐり 写真
 で見えるサブカル郷土史 佐々木孝昌
 (神戸新聞総合出版センター)

本書は、神戸新聞で連載中の「四ツ目がおおる」兵庫はみだし近代考」の第五〇回までを加筆・修正し、まとめたものである。

著者は生粋の神戸っ子。フリーのラジオディレクター、ライターを生業とし、「メインの郷土史から抜け落ちた」「学術的研究対象にもならない」ような歴史の痕跡や事跡にスポットを当てる「サブカル郷土史家」としても活動する。温泉跡地や幻の梅林、電柱や銅像など、主に明治から戦前期に兵庫県内に存在した名所や建造物を取り上げる。



神戸文芸文化の航路 画と文から辿る港街のひろがり 大橋毅彦 (琥珀書房)

大正から昭和にかけて海港都市神戸には、多彩な才能が集まった作家・詩人・画家等がジャンルを超えて交流、協同、影響しあい文化空間を生み出していた。

詩人の竹中郁、井上増吉、版画家の川西英、作家の陳舜臣などに目を向けるほか、関西学院大学で発行された同人誌等を取り上げ、神戸の街で育まれた諸芸術の多様性とひろがり考察する。芸術家たちの協同の例として、昭和二十五年(一九五〇)に中央図書館で開催された「中国現代版画展覧会」も紹介されている。

|| その他の新刊 ||

かび
 徴の生えた病棟で ルポ神出病院虐待事件 神戸新聞取材班 (毎日新聞出版)
 甲子園球場100年史 工藤隆一 (河出書房新社)
 ねじれた空を背負って たかとう匡子 (思潮社)

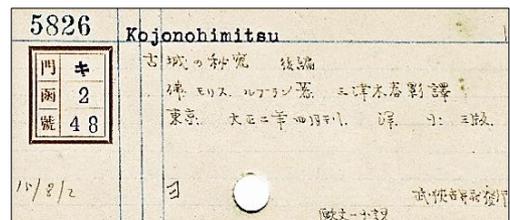
神戸 その③
 あんな人こんな人

横溝 正史 よこみぞ・せいし 探偵小説の巨匠
 明治35年(1902)～昭和56年(1981)

横溝正史(本名・正史)は、現在の中央区東川崎町に生まれ育ちました。本好きの少年で三津木春影の探偵小説を愛読し、神戸二中(現兵庫高校)では同じく探偵小説好きの友人・西田徳重と四六時中語り合い、外国の探偵雑誌を探して三宮の古本屋をまわるなど、24歳で江戸川乱歩の招きに応じて上京するまで、探偵小説に魅せられた日々を神戸で過ごします。

自伝「続・書かでもの記」に神戸市立図書館のエピソードがあります。小学校6年生のとき、『古城の秘密』の前編を近所の人から貸してもらい夢中になるが後編が手に入らず血眼で探していたところ、図書館のカタログ(目録)で見つけ大喜びしたと回想しています。大正3年当時、図書館は相生町にあり、横溝の家から15分ほどの距離で足繁く通っていたといいます。また、図書館は大正10年に大倉山へ移転しますが、その翌年に図書館で行われた馬場孤蝶の講演会「探偵小説の話」を徳重の兄の西田政治と聴講、同じ会場には知り合う前の江戸川乱歩がいたそうです。

上京後は雑誌「新青年」の編集長を務め、昭和7年から文筆に専念。戦後、『本陣殺人事件』をはじめに名探偵・金田一耕助が活躍する長編を次々と発表し、本格探偵小説の第一人者の地位を確立しました。昭和40年代後半から、作品の文庫化や相次ぐ映画化により横溝ブームが起こりました。『八つ墓村』『悪魔が来りて笛を吹く』『悪魔の手毬唄』など神戸が登場する作品が多数あります。



『古城の秘密 後編』の目録カード(当館蔵)
 当時、検索用に冊子とカード式の目録が備えられていた。横溝はどの目録を見たのだろうか。
 ※本は除籍、所蔵していません。

*1 「続・書かでもの記」『横溝正史自伝的随筆集』所収
 *2 『古城の秘密』は、三津木春影訳 原作はモリス・ルブランの『813』
 *3 小説家・翻訳家 *4 『探偵小説四十年』江戸川乱歩著より

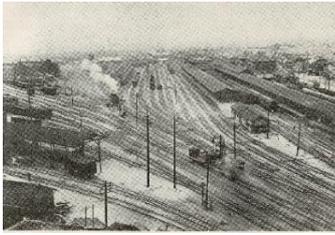
ランダム・ウォーク・

イン・コウベ⑩

神戸ハーバーランド

JR神戸駅の海沿いにある神戸ハーバーランドは、多くの施設や店舗があり、神戸を代表するスポットとして親しまれています。ここにはかつて国鉄（現・JR）の貨物駅である湊川駅があり、その跡地を中心に再開発して街がつくられました。

明治七年（一八七四）五月十一日、日本で二番目の鉄道路線が大阪と神戸の間に開通しました。当時の神戸駅は車両整備などの工場も併設され、広大な敷地を持っていました。



明治22年に竣工した二代目神戸駅。写真の左側部分が後に湊川駅として分離する。
画像：『神戸駅史』より

同駅は昭和三年（一九二八）、海沿いの部分を湊川駅として分離新設して貨物の取り扱い業務を移行し、貨物専用駅としました。貨物列車は戦

前・戦後と、日本の経済を支える一端を担いますが、海運でのコンテナ輸送の増大と、トラック輸送への移行が進み、同駅分離時三二万トン以上あった貨物発送量は昭和五十年には一五万トンと減少していきま

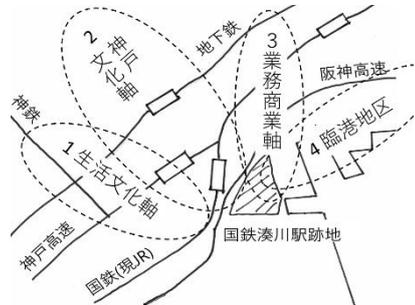
す。また、かつては新開地など神戸駅周辺が市の中心地でしたが、戦後その地位は次第に三宮に移っていくこととなります。

神戸市は神戸駅周辺の活性化のために、湊川駅のある土地に着目します。国鉄に貨物駅移転の要望を出し、駅跡地を中心とした地域の再開発計画を打ち出しはじめました。

昭和五十一年（一九七六）、「新・神戸市総合基本計画（マスタープラン）」で神戸駅周辺を「都心の西の核」と位置づけました。また、マスタープランを受けて五十八年から五十九年にかけて「国鉄湊川駅跡地利用計画策定委員会」が詳細な検討を行い、

1. 平野から東川崎へつながる住宅と商業が中心の生活文化軸、
2. 大倉山から神戸駅への神戸文化軸、
3. 三宮から神戸駅への業務商業軸、
4. 神戸駅東部から神戸港へと展開する臨港地域という四つの軸が交差する「扇の要」としての位置を占めると

ともに、都市周辺において得がたい規模をもっていると報告しました。



「扇の要」としての位置づけ概念図

湊川駅は昭和五十七年に業務を停止、六十年に正式に廃止され、神戸市がその土地を購入しました。

この湊川駅跡地の名称は、市民からの公募に基づき「ハーバーランド」に決定しました。「神戸ハーバーランド地区地区計画」も策定され、「海につながる文化都心の創造」を基本テーマとし、まちづくりが具体化していきます。



建設初期のハーバーランド。学校（敷地右下）から建設が始まった。
画像：『KOBE HARBORLAND』より

ハーバーランド内の施設の配置については、南側に教育・住宅施設、中心部に商業・文化施設、北側に各種事務所を擁する業務施設を置き、東側の岸壁はフェリーターミナルとして整備することとなりました。

昭和六十年十月三日、ハーバーランド着工記念式が執り行われ、まず公共施設・教育施設から工事が開始し、市立盲学校、市立摩耶兵庫高等学校がここに移転、市立湊小学校が開校しました。中心部には阪急百貨店、西武百貨店、ダイエー、オーガスタプラザが outlet し、ホテルニューオータニも開業、神戸新聞社も移転します。東側の高浜岸壁には、フェリーターミナルと複合商業施設「モザイク」が建設されました。

平成四年（一九九二）九月一日に行われた街びらき記念式典には数千人が訪れ大変な賑わいでした。『神戸新聞』の記事に、訪れた人が「店などがちらばってあるので、なんだか万博のパビリオンを歩いているような気分」と話したとあります。神戸ハーバーランドは期待の新名所としてスタートを切りました。

※現在の出店店舗、ホテルとは異なります
参考文献：『日本国有鉄道百年史』九巻、『神戸駅史』、『新修神戸市史』行政編三、『KOBE HARBORLAND』、『都市政策』第七一号ほか